

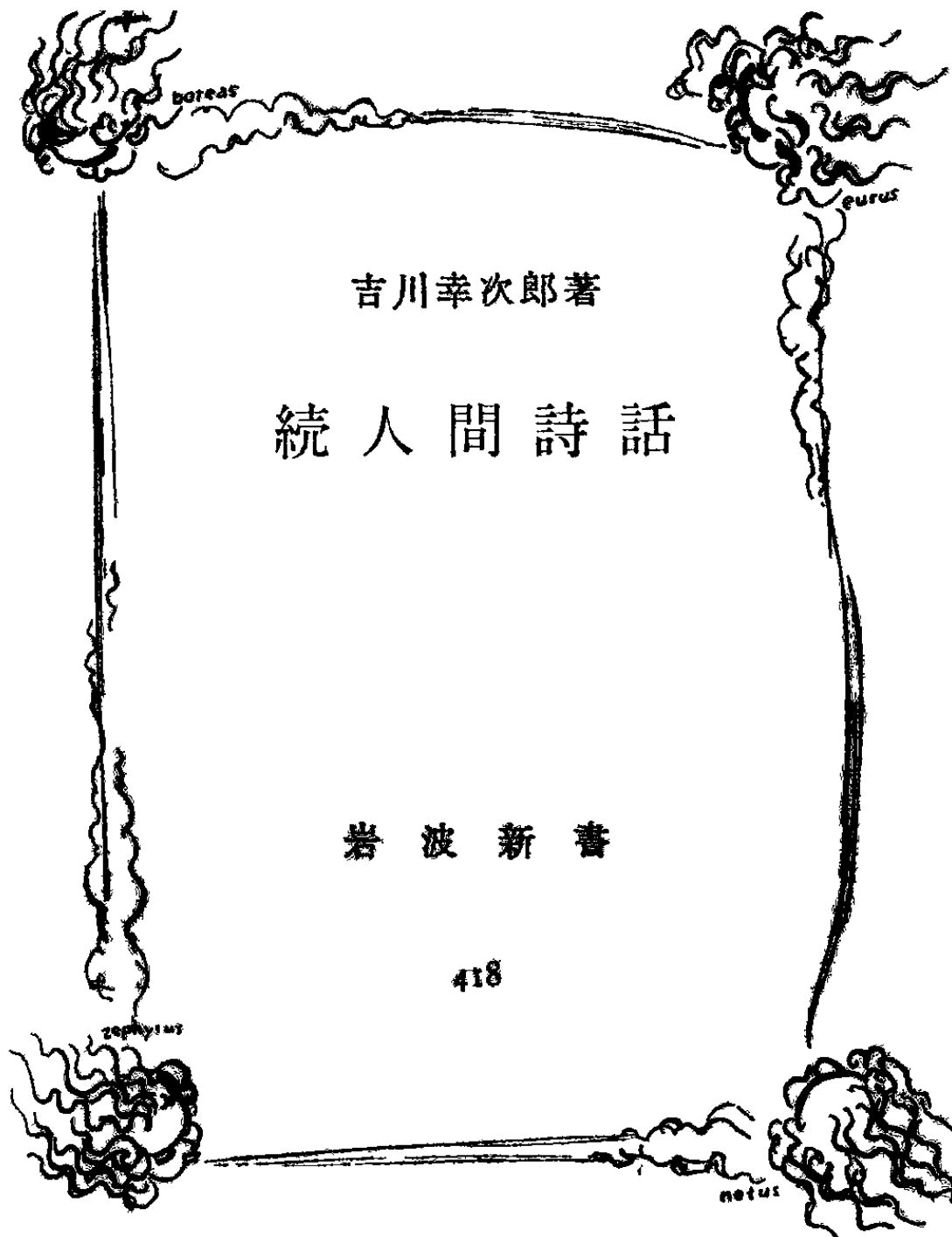
吉川幸次郎著

続 人 間 詩 話



岩 波 新 書

418



吉川幸次郎著

続人間詩話

岩波新書

418

吉川幸次郎

1904年神戸に生まれる

1926年京都大学文学部卒業

専攻—中国文学

現在—京都大学教授

著書—「唐代文学抄」「杜甫私記」

「杜甫ノート」「元雜劇研究」

「新唐詩選」「新唐詩選続篇」

「漢の武帝」「人間詩話」

(以上四点岩波新書) など

続人間詩話

岩波新書（青版）418

1961年5月29日 第1刷発行 ©

¥ 100.

著 者 よし かわ こう じ ろう
 吉 川 幸 次 郎

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都板橋区板橋町 6 - 3289

印刷者 白 井 知 一

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 神田一ツ橋2-3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・永井製本

目次

その五十一	王之渙	一
その五十二	王之渙	四
その五十三	柳宗元 (七三—八四七)	六
その五十四	柳宗元	二一
その五十五	柳宗元	一四
その五十六	夏目漱石 (一八七—一九二六)	一八
その五十七	夏目漱石	二二
その五十八	顧炎武 (一六三—一六八二)	二五
その五十九	顧炎武	二八
その六十	李商隱 (八三—八五八)	三四
その六十一	李商隱	三六
その六十二	李商隱	四〇
その六十三	韓愈 (七六—八二四)	四三

その六十四	韓愈……………	四七
その六十五	韓愈 張籍（七六五？—八三〇？）……………	五〇
その六十六	杜牧（八〇三—八五三）……………	五三
その六十七	惲格（一六三—一六九〇）……………	五六
その六十八	惲格……………	五九
その六十九	張問陶（一七六四—一八二四）……………	六三
その七十	張問陶……………	六六
その七十一	張問陶……………	六九
その七十二	張問陶……………	七三
その七十三	張問陶……………	七七
その七十四	購書懷旧絶句……………	八一
その七十五	黄遵憲（一八四八—一九〇五）……………	八四
その七十六	黄遵憲……………	八八
その七十七	翁同龢（一八三〇—一九〇四）……………	九一
その七十八	秋瑾（一八七五—一九〇七）……………	九四
その七十九	李白（七〇一—七六二）……………	九七

その八十	湯頭祖 (二五〇—二六六)	101
その八十一	曾幾 (二〇八—二六六)	104
その八十二	曾幾	106
その八十三	憨山德清 (二五四—二六三)	112
その八十四	雪浪洪恩 (二五四—二六八) 等滋鴻恩	115
その八十五	魯迅 (二八一—一九三六) 薩都刺 (二三〇—?)	130
その八十六	高啓 (二三六—二七四)	133
その八十七	沈周 (二四二—二五〇)	127
その八十八	錢大昕 (二七三—二八四)	131
その八十九	錢大昕	136
その九十	康有為 (二八五—一九三七)	140
その九十一	康有為	144
その九十二	康有為	148
その九十三	佐久間象山 (二八一—二八四)	153
その九十四	佐久間象山	156
その九十五	佐久間象山	160

その九十六	毛沢東（二八三—）	一六三
その九十七	毛沢東	一六六
その九十八	毛沢東	一七〇
その九十九	李清照（二〇四—？）	一七四
その百	陸卿子 朱妙端	一七八
附録の一	左思	一八三
附録の二	杜甫（七三—七七）	一八七
附録の三	購書懷旧絶句	一九一
あとがき		一九五

その五十一 王之渙

有名な詩というものは、誰にでも感動を与えるから、有名な詩なのである。誰にでも感動を与えるというのは、非凡な発想と、非凡な表現とが、その詩にあるからであり、しかもその非凡さが、誰にでもすぐぱっとうけとめられる形に、しくまれているからである。しかしそれだけに、その非凡さを感じることは容易でも、一つ一つの子句を解釈しようとするとき、非凡だけに困難を感じる場合が、すくなくない。

八世紀の詩人である唐の王之渙の、有名な五言絶句も、それに属するかと思われる。

白日依山盡

黃河入海流

欲窮千里目

更上一層樓

白日 山に依りて尽き

黃河 海に入りて流る

千里の目を窮めんと欲して

更に上る一層の樓

「鸛鵲樓に登る」と題して、「唐詩選」にもおさめられ、誰でもが知っている。そして、白日依山尽、黄河入海流、欲窮千里目、更上一層樓、原文ではたった二十字が、大へん雄大な風景であり、雄大な詩であるという感動は、誰でもがもつ。しかしやはりなかなか難解な部分があるのであって、坊間の注釈は、必ずしも人人を満足させない。私は私の解釈をこころみよう。

まず、詩の作られた鸛鵲樓というのは、どこにあるかということから、せんさくを始めれば、それは山西省の永濟県にある。県は、山西省の西南のすみに位する都会であって、黄河がその西がわを流れている。黄河はこのあたりまでは、山峽のあいだを、ずっと北から南へと流れて来たのが、この都会のやや南のところで、大きく東へと、ほとんど直角に、折れまがろうとする。そのまがり角のすこし手前にあるのが、この都会である。地名が一時代ごとに変るのは、中国の歴史を治めるものの、なやみとするところであるが、唐のころは河中府河東県といい、すでに大都会であった。

鸛鵲樓というのは、この都会をとりまく城壁の西南のすみにある、すみやぐらであって、

すでに相当高いであろう城壁の上に、更に高くそびえる三層楼であると、地志に見える。

そうして南には中条山の山なみをのぞみ、西に見おろすのは黄河である、という。大陸の大動脈である黄河は、もうすこしでおこす東方への大屈折を準備しつつ、ここではなお北から南へ、とうとうと流れている。

さて第一句の、白日は山に依りて尽き、白日依山尽。

山西省は大たいは山国である。しかし地図を見ると、永濟泉の周囲には、相当の平野がひらけている。もっともそれは全く山を見ない平野ではなく、南には中条山をのぞむというように、地平のはしには山がある。つまり宋の沈括の「夢溪筆談」に、おなじく唐人が鸛鵲楼を詠じた詩として、暢諸なる詩人の作をあげ、「天の勢は平らかなる野を囲み、河の流れは断れたる山に入る」、天勢囲平野、河流入断山、というのが、楼上からの眺望の、別の表現なのである。またさればこそ、この詩にも「白日は山に依りて尽き」というのである。

ところで「山に依りて」とはどういうことなのか。次の回で考えよう。(一九五七年一月)

白日依山盡、黃河入海流、欲窮千里目、更上一層樓。

前に述べたように、詩の作られた鸛鵲樓^{かづくろう}の周囲には相当の平野があり、平野のはしには山なみがつらなっている。ところで「白日は山に依りて尽き」という白日は、まっしろにきらきらとかがやく、まひるの太陽というのが、普通の語義である。注釈書のあるものが誤るように、落日の意味ではない。ではそれが「山に依りて尽き」とは、どういうことか。

ここの「白日」の二字は、太陽そのものよりも、きらきらと光る太陽を中心として、その射出する光の矢に充満した天空をいうと思われる。それは大きく平野の上にかぶさり、たれさがり、地平と接するが、地平のふちどりとしてあるのは山なみである。その山なみにもたれかかるようにして、白日の支配する領域は、尽ききわまっているというのが、白日依山尽という五字によって、詩人の意味せんとするものであったと、私は考える。

次に「黃河は海に入りて流る」。黃河入海流。この句についても、坊間の解釈は、往往にしてあやまる。黃河は、鸛鵲樓の西を、とうとうと流れている。しかしすぐに海にそそぎこむ

のではない。ここから下流の黄河の河道は、時代によって変遷があるが、何にしても、山西省の西南隅であるここから、中国の東海岸までは、直線距離にして千マイルほどある。つまり下関から東京までほどある。その距離を、黄河は更に東にむかって流れに流れた上、はじめて海にそそぎこむのである。しからは黄河入海流という五字は、やがては東海にそそぎ込むべき大地の大動脈として、すさまじいエネルギーをたたえたぎらせつつ、黄河はここを流れている、ということではなければならない。

ところで、以上、仰げば山に依って尽きる白日、俯しては海に入ろうとして流れる黄河、というのは、楼のおそらくは二層目からのながめである。この雄大な眺望を、更に更に雄大にし、千里のかなたまでも充分に見はるかすべく、もう一階上の、第三層へとのぼってゆく、というのが、あとの二句、「千里の目を窮めんと欲して、更に上る一層の楼」である。

欲^ほ窮^{きゆう}千里目^{せんりもく}と、千里の語が使われているのには、特別なわけがある。黄河の河道は、発源以来、海にはいるまでに、九度屈折し、屈折して方向をかえるごとに千里を流れる、といういつたえが、「山海経^{さんかいけい}」、「水経注^{すいきょうしゆ}」などに見える。鸛鵲楼のある河中府は、その最後のまがり角であって、ここまでの千里を、南に流れて来た黄河は、このやや南のところで、

直角に東へ折れ、最後の千里を東へと流れ、やがて海に入る。すると、「千里の目を窮める」ということは、千里さきの黄河の河口、それはもとより現実には見えるべくもないが、そこまでも見はるかすべく、更に一層の楼を上る、もう一つ上の階へのぼる、ということになる。

娘が中学校で習っている国語の教科書には、この詩が挿絵つきで収められているが、楼のすぐそばに海みたいなものを書いてある。また楼は二階しかない。更に上る一層の楼の、更に、を、どう解くつもりなのか。

(一九五七年二月)

その五十三 柳宗元 (七七—八七)

唐の柳宗元^{りゅうそうげん}の自然詩をあつかった卒業論文を審査するために、しばらくぶりにその詩集を読んだ。散文家としては、周知のように韓愈^{かんゆ}とならぶ大家である。詩は、用語が甚しく鍛練されているため、ややとっつきにくいが、晶潔さは無類である。何よりも尖鋭な神経のもちぬしであり、その尖鋭さのゆえに、三十三歳の青年官吏は、当時の改革運動にとびこんで、

失敗し、湖南の永州^{ちゅうしゅう}に流される。そこには、現在の世界の比率でいえば、アフリカの内陸のように、人間の美意識をはじめてむかえ入れる自然があった。美しくはあるが人間のけはいに乏しい自然、その中をさまよう孤独者として、詩はいよいよとぎすまされる。「唐詩選」にも収める「南澗^{なんがん}の中にて題^いす」はその一つである。彼の散文では「石澗^{せきかん}の記」として記す溪谷であらう。

秋 氣 集 南 澗

秋の氣は南の澗^{かん}に集まり

獨 遊 亭 午 時

独り遊ぶは亭^{てい}午の時

秋のおとずれのおそい南方の蠻地も、やっと秋。清澄な空氣が、この谷間に凝集する。ただひとり、そこへ来たのは、まひる時。

同 風 一 蕭 瑟

回^{かい}風の一たび蕭瑟^{しょうしつ}たれば

林 影 久 參 差

林の影は久しく參差^{さんし}たり

回風とは「楚辞」に見える語であり、その注に、飄風、はやて、という。さつとふきわたる風に、林の木はいつまでもゆれ、参差といりみだれた影をおとす。

始至如有得
稍深遂忘疲

始め至りしとき得る有るが若し
稍や深くして遂に疲れを忘る

ここへ来たばかりのとき、すでに何か心にふれるものがあった。だんだん奥へと進むにつれて、風景はいよいよ示唆的であり、ここまでの徒歩の疲労を忘れさせる。

羈禽鳴幽谷
寒藻舞淪漪

羈りなる禽は幽き谷に鳴き
寒げなる藻は淪漪に舞う

友をうしなつた鳥、流れにもてあそばれる藻。それらと内面的につらなるものとして、次

には追放者の悲しみがうたわれる。

去國魂已遊

国を去りて魂は已に遊い

懷人淚空垂

人を懷いて涙は空しく垂る

孤生易爲感

孤りなる生は感^もいを為し易く

失路少所宜

路を失いては宜しき所少し

ここの「国」とは首都の意である。改革運動は失敗し、謀叛人として首都長安を追われたおのれの魂は、生きながらさまよい、はなればなれになった家族、友人のことを思えば、涙はむなく垂れる。ただでさえ多感な性質は、孤独な生活によって一そう感情をたかぶらせやすい。そもそも改革運動への参加、失敗は、人生行路をふみ失^あまるはじめであった。以来、すべてはくいちがい、おのれの政治的生命はおわった。

索寞竟何事

索寞として竟に何をか事とせんとはする

徘徊祇自知

徘徊して祇だ自ずから知る

索寞は、空虚と訳してよからう。どう考えて見ても、どうあせつて見ても、竟に、けっきよく、何の希望もなく、したがって何のやりがいのある仕事もなさそうな、空虚な未来だけが、おのれの前にある。しかしおのれのかつての行動が、正しい政治への情熱によることを、空虚な山野を徘徊するおのれ自身のみは知っている。

誰爲後來者

誰か後に來たる者と爲す

當與此心期

當に此の心と期うべし

おのれのように美の意識と真理への熱情とをもって、このへんびな土地のへんびな谷間を、次におとすれるものは、誰か。「誰爲後來者」。もしそうした誰かがあるとするならば、おのれの今の心境、静寂な自然にうながされて、反省と、そうして自信とを、かさねるおのれの心境を、彼の心境と合致するものとして、理解してくれるであらう。散文で書いた「石澗